

幼児の描画活動における運動調整機能の発達

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
高林 顕史

本研究では、幼児の描画活動における運動調整機能の発達について検討する目的で、3歳後半から6歳後半の幼児に対して、DALテスト(Draw A Line slowly Test)を実施した。幼児87名は、20cm間隔の2点をまっすぐの一本の線でつなぐ課題を行なった。本課題は以下に紹介する、全5条件で構成されている。Base条件(スピードに関する教示を与えない)、Slow条件(「できるだけゆっくりかいてください」という言語教示)、More Slow条件(「さっきよりもっとゆっくりゆっくりかいてください」という強調された言語教示)、Doll提示条件(「ゆっくり」のイメージを喚起するカメのぬいぐるみを子どもに提示)、Model提示条件(実験者による「ゆっくり」モデルの提示)。

分析の結果、3歳後半ではDoll条件がSlow条件、More Slow条件より運動調整が促進された。4歳前半には条件間に有意な差が現れなかった。4歳後半以降の年齢群においては、More Slow条件が所要時間を増大させるように働いた。6歳後半はDoll条件がModel条件よりも効果的に働いた。以上から、3歳後半から6歳後半までの運動調整機能の発達の变化の特徴を以下のように考察する。運動調整機能は年齢の上昇とともに増大する。3歳後半はことばによる直接指示より、ぬいぐるみによる運動イメージの提示のほうが「ゆっくり」ということばを捉えやすい。4歳後半以降は、ことばの意味的側面が運動調整機能の中心となる。6歳後半は、ぬいぐるみの提示が「もっとゆっくり」として捉えられるようになる。